

農業の登録内容は頻りに変更されます。農業は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpjn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpjn.ne.jp/osaka/>)

営農総合センター 指導販売課 072 (444) 8001



水稲

◆種もみの比重選と消毒

①種もみの準備
乾もみで10a当たり4kg程度用意する。

②育苗箱の消毒

育苗箱は事前にきれいに洗い、イチバン乳剤(5000~10000倍/瞬時浸漬または散布)で消毒しておく。

③比重選

充実した種子を種もみとするため、比重選を行なう(表1)。沈んだ種子を種もみとし、比重選後は十分水洗いをする。

④種もみの消毒

比重選の終わった種もみは水を切った後、網袋等に5分目程度入れ、薬液(表2)に24時間浸漬する。このとき、

・薬液の温度は10℃以下にしない。

・浸漬中は1~2回袋を薬液中で揺すり、十分薬液が浸透するようにする。

・消毒が終わった後、水洗いは絶対に行わない。

・消毒後は水切りし、1日程度陰干しを行ない、種子に薬剤をしつかりと附着させる。

◆浸種・芽だし

十分に吸水させ、もみ自身が

持っている発芽阻害物質を浸出させて、発芽ぞろいを良くするため浸種を行なう。

種子消毒の終わったもみを水に漬け、ハト胸程度に催芽させる。

浸種日数は、水温が20℃では4~5日程度で、あまり水温が高いと発芽がふぞろいになる。水は種もみの体積の2倍程度必要。2日くらい経過し、水が濁ってきたら静かに水を入れ替える。

◆は種

育苗箱に育苗培土を入れ、ムラなく平らにし、十分かん水する。1箱当たり催芽もみで180g(乾もみ160g)を均一にまき、種が隠れる程度に覆土する。出芽までかん水は行なわない。

◆出芽

は種後、25~30℃程度に2~3日保てるようビニールや保温シートを上からかぶせて保温する。育苗箱の積み重ねは、10~15枚程度とし、一番上には土を入れた育苗箱を置く。保温の途中、温度差による出芽ムラをなくするため、上下の箱の積み替えを行なう。

◆緑化

出芽した白い芽に徐々に弱い光を当て、葉緑素を形成させる。

◆ジャンボタニシの防除

本田の春耕は丁寧に行ない、貝の数を減らしておく。入水時には水田の取水口に5~6mm目の金網を張り、水路から水田への貝の移動を防ぐ。

◆Zボルドー

適切な肥培管理に努め、被害葉はほ場に放置せずに処分する。5~6月は、べと病の被害が多くなるので、発生前にはZボルドー(500倍/1~1)で防除する。ただし、散布後は白く汚れる。

◆病害虫防除

べと病の被害が増加する時期である。密植やチッソ肥料が多いと発生が助長される。は種量を減らして薄まきし、ハウスの換気を行ない、多湿を避ける。

◆肥培管理

栽培期間が30日程度と短くなるので、前作の肥料の残存量を勘案し、施肥量は減らす。ハウス内では水分不足になると要素欠乏などの生育障害が出るため、土壌水分に注意する。また、露地栽培では栽培期間が梅雨にかかると、湿度が出やすいので高うね栽培し、水はけを良くする。

◆病害虫防除

雨が多いと白さび病の発生が多くなる。薄まきを心掛けたら、生育初期にランマンフロアブル(2000倍/収穫3日前まで/3回以内)を予防的に散布する。

◆開花期の防除

訪花昆虫(コアオハナムグリ、ケシキスイ類)は、幼果にひっかき傷やリング状の傷をつける。また、灰色かび病は、果実にうろこ状の傷をつくる。

◆収穫

収穫の目安は、葉が70~80%程度倒伏した頃で、天気の良い日を選んで収穫する。

◆貯蔵管理

風通しが悪いと病気が発生しやすいので、たまねぎの首部分を早く乾燥させる。つり小屋では詰めすぎないようにする。

◆たまねぎ

ランマンフロアブルは、非結球あぶらな科葉菜類で登録がある。

◆Zボルドー

野菜 トンネル早熟栽培 始めるため、引き続きトンネル被覆を行なう。日中はトンネルのすそを開けて換気し、トンネル内が高温にならないようにする。開口部は徐々に広げ、5月中旬をめどに除去する。

表1. 比重選における比重と硫安の量(水10ℓあたり)

種類	比重	硫安	食塩
うるち	1.08	1.4kg	1.1kg
もち	1.06	1.0kg	0.8kg



表2. 種もみの消毒に登録がある農薬

対象病害虫	RACコード	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数/使用方法
ばか苗病 いもち病 もみ枯細菌病 苗立枯細菌病 苗立枯病 (リゾプス菌、トリコデルマ菌) ごま葉枯病 褐条病	F : 3 F : M01	テクリードCフロアブル	200倍	浸種前/1回/24時間種子浸漬
いもち病 苗立枯病(リゾプス菌)	F : 未	エコホープDJ(※2)	200倍	浸種前~催芽前/-/24時間種子浸漬
ばか苗病 もみ枯細菌病 苗立枯細菌病	F : 未	エコホープDJ(※2)	200倍	浸種前~催芽前/-/24時間~48時間種子浸漬
イネシンガレセンチュウ	I : 1 B	スミチオン乳剤(※3)	1000倍	は種前/1回/6~72時間浸漬

※1 薬液の量は種もみの体積と同量以上作る。
 ※2 エコホープDJは微生物を有効成分とした、環境にやさしく、安全性の高いイネ種子伝染性病害防除剤である。微生物を有効成分としているため、薬液は反復使用を避け、24時間以内に使用する。また、過度の風乾を避ける。なお、エコホープDJはテクリードCフロアブル等、一部の農薬との同時処理ができない。
 ※3 スミチオン乳剤はメーカーにより登録が異なるので、ラベルを確認して使用する。

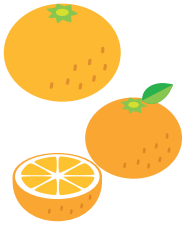
*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示しています。

収穫14日前まで／3回以内)を散布する。

また、昨年ミカンガタマムシの被害があった園では(半月状の成虫脱出孔やノコギリ状に食害された葉があれば要注意)、成虫の発生を認めたらミクロデナポン水和剤85(1700倍)／収穫21日前まで／4回以内)を散布する。

◆**腹接ぎや高接ぎによる品種(系統)更新**

- ①接ぎ木時に穂木と台木の形成層を合わせる。
- ②接ぎ木部への雨水の侵入、乾燥防止と穂木の固定のため、接ぎ木テープでしっかり巻く。
- ③活着後は、接ぎ木テープを破って発芽できない場合は、部分的にテープを破って発芽を助ける。
- ④複数発芽すれば、一芽だけ残し、風で折れないように支柱に誘引する。



もも

貯蔵養分による生育から、新葉の光合成による養分へと切り替わる時期であり、新根や新梢の伸長、果実の肥大が盛んとなる。そのため、新梢管理、摘果、袋掛け、病害虫防除と作業が遅れないよう計画的に行なう。

◆摘果と袋掛け

生理落果の様子を見ながら、摘果は2〜3回に分けて行なう。早生品種は、30〜80cmの長果枝に品質の良い果実がなりやすいため、最終的に長果枝の中央部付近に1〜2果、30〜50cmの中果枝に1果を残し、5月中下旬から袋掛けを行なう。

晩生品種は、10cm程度の短果枝を中心に残す。残す割合は、短果枝5本のうち1本に1果となるように行なう。

◆病害虫防除

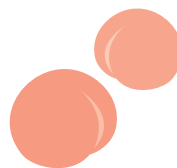
5月上旬に、黒星病や灰星病、うどん粉病の防除に、ストロビドライフロアブル(2000倍)／収穫前日まで／3回以内)を散布する。

また、アブラムシ類、シンクイムシ類、モモハモグリガの防除には、ロデイー乳剤(1000〜2000倍)／収穫前日まで／5回以内)を散布する。ウメシロカイガラムシが発生してい

る園では、オリオン水和剤40(1000倍)／収穫14日前まで／2回以内)を散布する。

5月中旬には、せん孔細菌病の防除に、バリダシン液剤5(500倍)／収穫7日前まで／4回以内)を散布する。

*オリオン水和剤40は、カイガラ虫類で登録がある。また、散布時は、オリオン水和剤40のみで使用する。



うめ

◆病害虫防除

黒星病は、老木での発生が多い。5月上旬に、ストロビドドライフロアブル(2000〜3000倍)／収穫7日前まで／3回以内)を散布する。

また、カイガラムシ類が発生している園では、5月上旬にスプラサイド乳剤40(1500倍)／収穫14日前まで／2回以内)を散布する。

ストロビドドライフロアブル、スプラサイド乳剤40の散布に当たっては収穫前日数に十分注意する。
*スプラサイド乳剤40は、小粒

核果類で登録がある。

◆実肥

5月中旬に、10a当たり燐加安S403(14.10.13)を20kg施用する。

いちじく

◆芽かき

- 芽かきは、葉が3〜4枚展開する頃に行なう。一文字整枝で、せん定時に2芽残した場合は、次のポイントに注意する。
- ①上芽は勢力が強くなり過ぎるので取り除く。
- ②なるべく主枝に近い節の芽を残す。
- ③生育の早過ぎるものや遅過ぎるものを取り除き、生育をそろえる。
- ④果実へ十分日光が当たるよう、主枝の片面で結果枝が40cm間隔となるようにする。

◆病害虫防除

アザミウマ類の防除には、5月末〜6月上旬に、モスピラン顆粒水溶剤(2000倍)／収穫前日まで／3回以内)を散布する。



*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数)／使用時期／総使用回数)を表示しています。